

●当院の検査の紹介

①屈折検査

機器をのぞくと、器械の中に絵が見え検査が始まると絵がぼけたり、はっきりしたりを繰り返して目の屈折(遠視・近視・乱視の程度)を調べます。この値を参考に視力検査をします。

②眼圧検査

目の表面に軽く風を当てて、空気圧で眼圧を測ります。

③視力検査

年齢や患者さんの見る力に応じて様々な指標を用いて視力を測ります。そして患者さんに合ったレンズを選び眼鏡を入れてどのくらいまで視力が出るかを測っていきます。

④角膜内皮細胞検査

角膜の内皮細胞の状態を写真に撮る検査です。手術前には必ず行う検査の一つです。

⑤IOL マスター

眼球の奥行きを測る検査です。白内障の手術をする際、濁ってしまった水晶体の代わりに人工の眼内レンズを入れます。その眼内レンズの度を決定するために必要となります。

IOL マスターは直接眼に触れることなく短時間で測定出来て、患者さんへの負担も少ないです。

⑥Aモード・Bモード

白内障の濁りが強い場合や他の眼の疾患があってIOL マスターでは測定出来ない方もいます。その時は、このAモードという機器で測定します。この機器では眼に直接器械が触れるので痛み止めの目薬を点眼して検査します。

Bモードは眼のエコー検査です。

何らかの原因で眼の奥が見えない場合に行います。



⑦眼底カメラ

眼底の写真を撮る機器です。

網膜の状態がわかります。糖尿病網膜症の眼底出血や加齢黄斑変性や黄斑上膜などの黄斑部(網膜の中心部)の疾患の状態が撮影出来ます。

視神経も撮影出来るので緑内障のかたも撮影します。



⑧OCT(光干渉断層計)

眼底カメラが網膜を二次元に撮影するのにたいして、

OCTは三次元に撮影し必要な箇所の断面図を見ます。

黄斑部の腫れや穴、膜が張っている様子などわかります。

また視神経も撮影出来ます。

治療前後の比較や、進行具合など患者さんにもわかりやすく見てもらうことが出来ます。



⑨視野検査

見える範囲を測定します。

当院には二つの検査機器(A.B)があり、患者さんの状態や症状によって使い分けています。暗室で行う検査です。

緑内障の早期発見や進行具合を測定するために大切な検査の一つです。



⑩中心フリッカー

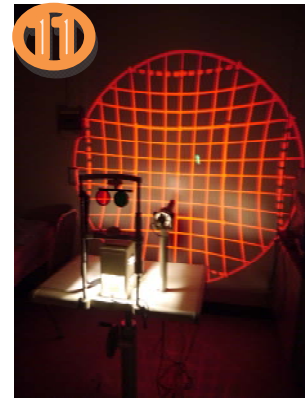
光がチラチラするのがわかったらボタンを押してもらう検査です。

視神経が障害されると、光のちらつきの反応が悪くなる場合があります。



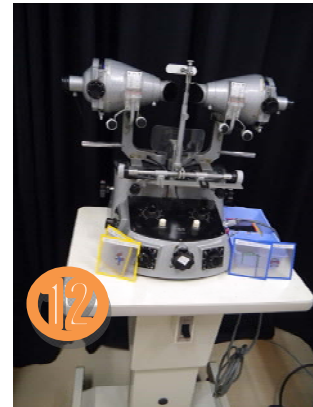
⑪眼球運動検査

眼がどの方向にも制限なく動くか検査します。
暗室で検査します。



⑫シノプト

斜視のずれ幅を測定し、両眼で見る力、立体感の有無をみたり、眼が動く幅を測定したり出来る検査です。
斜視や弱視のお子さんや、眼筋麻痺の患者さんなどに検査をします。



この他にも色覚検査や眼鏡合わせや涙の量の検査など様々な検査を様々な道具を使用し検査します。